

リニューアル版

あいあい草創期の秘話 ③

(前章からの続き) (この章は、2011年12月に書いたものを加筆修正)

新しい保育園の建設を決意した1998年10月、この決意を表明し、助言を得るために、尊敬する3人の大先輩を訪問したが、三人目は元大津市長の山田耕三郎(やまだ・こうざぶろう)さんだった。(2011. 12)

大津あいあい保育園 創立者(理事長) 下 村 勉

「特徴ある保育園を」 山耕さんの助言

山耕(やまこう)さん宅を訪問すると、いつものようにニコニコしながら迎えていただいた。私の話を聞くと、「それはいいことですね。ただ、どこにでもあるような保育園を作っても仕方ありませんよ」と述べられた。私は、「当然です。これまで私どもが言ってきたこと、めざしてきたことの思いのすべてを傾注した、特徴ある保育園を作ります」と決意を述べた。

山耕さんは、うなずきながら、「でも、過剰投資になってはいけません」とクギを刺すことも忘れなかった。「資金面で多少の無理をしても、子どもたちにとって最善の理想の保育園を作りたい」と考えていた私とは、思いに多少の違いがあることを感じた。

しかし、市長に当選された後、財政困難の中で「毎年2ヶ園の保育園の建設」などの公約を着実に実行された山耕さんには、現実的な判断もあったのだろう。数億円に上る建設費を確保するために、民間園が過剰な借入金を抱えて開園した場合、「あとが大変になる」との思いを直感的に感じられたに違いない。

こんな高潔な政治家がいたとは

山耕さんは、輝かしい政治経歴を持つ人だ。29歳で下阪本村の村長に当選して以来、市議会議員、県議会議員、そして市長、参議院議員と長い政治経歴を持たれる。

山耕さんは、一騎討ちの激戦となった1972年の大津市長選挙など、きびしい選挙戦も戦われたが、一度も落選しなかった。この人の最後の選挙は、1985年、定員1名の参議院滋賀地方区で、自民党候補を相手に30万票の得票で圧勝だった。

若くして村長に当選したことを、自分で「間違って当選した」と口癖のように言われた。ある時、その意味を尋ねたらこんな説明だった。

1947年(昭和22年)、敗戦直後の混乱がようやく沈静化し、日本社会の民主化が進む中で行われた村長選挙にムラの青年団に担がれて立候補した。しかし、無名の青年が当選するとは、当人を含めて誰も思っていなかった。ところが面白半分の投票などもあって予想外の当選をしてしまった。これが「間違って当選した」ということの意味だった。本当に「間違った当選」だったかは不明だが、ご本人はいつもそのように謙虚に語られていた。

その後、数々の選挙を戦われたが、この人は地元に支援を求めなかった。たいがいの候補者が選挙では地元の票を当てにする。山耕さんは、「地元が選挙で地元候補を応援するのは、地元へのお返しを期待するからです。支援を受けたら、当選後、地元役に役立つ働きをしなければなりません。しかし、政治家はどの地域にも、どの市民にも等しく働くべきです。自分の地元を他より優先してはなりません」との信念を持っておられた。

「地元のために働くのは、結局、自分の選挙のためです」。「政治家は自分を優先してはなりません」との考えを実行されていた。なんという高潔な政治家か。

毎週火曜日に市長相談 市役所玄関に陣取る

私たちは、1972年9月の大津市長選挙では、まさに骨身を削って「山耕」当選のために奮闘した。結果は僅差の勝利だったが、この山耕当選が、全国に先駆けた障がい児保育の制度化など、今日の大津の福祉・保育制度の基礎を作ることにつながった。

山耕さんは、市長当選の直後から、毎週火曜日の午後を「市長相談日」と定め、市役所玄関に陣取った。当時、市長に一般の市民が面会するなど、あり得ないことだった。有力市会議員の仲介が必要だった。だが、山耕さんは訪れる市民の誰とでも気楽に会い、その要望や悩みを聞いた。「市民との直接対話」が「住民本位の市政」に不可欠と考えておられた。

相談に訪れた市民の中に、「大津市障害児父母の会」の寺井虎彦さんたちがいた。「自分たちの子どもも、保育園や幼稚園に入れてほしい」と訴えた。当時すでに大津市では、近江学園研究室を母体とする発達相談チームなどの努力で、乳幼児の発達健診が進んでいた。「早期に発達上の問題を発見し、早期に手だてをうつ」という取り組みであった。ところが、早期に「障害がある」と認定されたために、保育園や幼稚園に入れてもらえないという皮肉な結果が続出していた。寺井さんたちは、「健常児と一緒に保育してほしい。それが自分たちの子どもにも、健常児にも良い結果をもたらす」と訴えた。山耕さんは訴えに真剣に耳を傾けた。

大津が「障がい児保育発祥の地」に

寺井さんたちは、坂本の真愛保育園や瀬田のつくし保育園で行われていた障害児保育の実践を紹介した。行政から何の援助もない中で、両園では障がいを持つ子どもを受け入れ、保育を進めていた。寺井さんは、「行政の援助があれば、どこの園でも、どの子どもも保育できる」と事実を示して主張した。山耕さんは、「そうですか。やればできるのですね」と応えた。

こうしたやり取りが出発点となって、本格的な検討が進められた。そして、山耕当選からわずか半年後の1974年4月、全国に先駆けて大津市で、障害児保育が制度化され、障がい児を受け入れた公立・民間のすべての保育園・幼稚園に市が加配の職員を配置した。乳幼児健診から就学まで切れ目のない施策を実施するという「大津方式」が出発したのだ。注目を浴びた大津市には、連日のように全国の自治体から視察団が訪れた。なかには、「大津に住めば保育してもらえる」と、わざわざ大津に引っ越してくる障がい児を抱えた家庭もあった。やがてこの制度は全国に波及し、国の制度にもなった。

こうして、大津は「障がい児保育発祥の地」と呼ばれるに至った。

こんな素晴らしい市長はもういない

数年前、山耕さん宅を久しぶりに訪れた時、こんな質問を受けた。

「私が市長の時、民間保育園の保母さん方の給与を引き上げるために、助成金制度を作りましたが、今もこの制度は存続していますか」と。私は「ありがたいことに、今も続いています。これのおかげで職員の昇給ができています」と答えた。

山耕さんが市長に当選された1970年代、公立と民間の間では数万円の給与格差があった。民間園には何年勤務しても給料はさほど上がらず、勤務年数が長くなると公立との格差は広がるばかりだった。これを「何とかしてほしい」というのは民間の保育現場の切実な要望だった。山耕さんは、選挙母体の「明るい革新市政をつくる会」の公約の一つにこの格差是正を掲げた。当選した山耕さんは早速、公約を実行して、この助成金制度を作った。

それからすでに37年が経過していたが、山耕さんはしっかりとその制度のことを記憶し、その行く末を案じておられたのだ。「それはよかったですね」と安堵された。「住民本位の福祉」をめざして創設した施策一つひとつに、退任後も心を砕いておられる様子を垣間見ることができた。「こんな素晴らしい市長はもう出ないのではないか」と思う。

2001年4月1日、大津あいあい保育園はこのような人たちに支えられてスタートした。

あいあい草創期の秘話 ③ 加筆編

山耕さんに関わるエピソードを長文になるが、いくつか付け加えたい。

(以下は、2020年10月に書き加えたもの)

Episode 1

市長の言葉に言葉失う

晴嵐保育園の増築起工式で

もう46年も前の1974年のこと。私の子ども2人を預けていた大津市立晴嵐保育園で増築運動を起こすことになった。当時の同園は60名定員で保育室は3つしかなく、このため、0歳から3歳を超えた子どもまでが同じクラスに詰め込まれていた。生後数か月の乳児は朝寝、昼寝、夕寝と静かに休むことが日課なのに、3歳児は体力的にも成長が著しく走り回るのが日課である。「赤ちゃんがお休みしているから静かにしてあげましょうね」などの保育が成り立つわけがない。

「これはあまりにもひどい」…当時、私は同園の保護者会長をしていたので、保護者会として増築運動に取り組むことを役員会に提案し、市へ要望することになった。

ちょうど市長に山耕さんが当選された翌々年で、保育をはじめ福祉施策の充実が急ピッチで進められていた。これはチャンスと思い、市長相談日に保護者会の要望書を携えて臨み、実情を訴えた。山田市長は訴えをしっかりと受け止められたようだった。しかし、「毎年2つの公立保育園を新設」という市長公約に基づく計画がスタートした年であり、「公立園の増築」という「番外の要望」が取り上げられるのは容易ではなかった。

何度も市へ要請を重ねた結果、ようやく要望が取り上げられることになった。

不十分な増築案の撤回迫る

ところが、当初、市の担当課が提示した増築案はきわめて不十分なものだった。園庭の半分ほどをつぶして保育室を作るという増築計画だった。増築で園児が大幅に増えるのに、逆に園庭が狭くなることは納得できなかった。「園のすぐ西隣に市の所有地が未利用のままあるではないか。これを利用してほしい」と担当課に訴えたが、聞いてもらえなかった。

そこで、私は市長に直接、「このような増築案には反対運動を起こします」と乱暴な申し入れをした。市長は「市民の皆さんに喜ばれないものなら、やる意味がありませんね」とあっさり計画案を撤回し、再検討を約束された。

そのような経過もたどりながら、最終案が出された。十分に満足できるものだった。隣の市有地を利用してちょうど2倍の120名定員の保育園に拡張するというものだった。その結果、保育室は6つになり、完全に年齢別保育ができるようになる。増築運動を始めたきっかけであった異年齢児の詰め込み保育が解消する。望外の喜びを役員たちと分かち合った。

謙虚そのものの人柄に感動！

ほどなくして、起工式の日を迎えた。運動を始めて1年たらず、何億円もの事業が実現するのである。感動だった。開式の前、市長の席へお礼を述べに行った。すると、なんと市長はすっと立ち上がり、「大変お待たせをいたしました。誠に申し訳ございませんでした」と深々と頭を下げられた。「こんなにも早く実現した」と喜びいっぱいだった私には返す言葉が見つからなかった。謙虚そのものの山耕さんの人柄を痛感し、感動した。

Episode 2

ずっと伏せられてきた 山耕さんの逝去

(以下は、2013年1月に書いたもの)

山田耕三郎さんは、2012年9月22日、95歳で逝去された。ところが「自分の葬式のために、世間の皆さんに厄介をかけたくない」との強い遺志が家族に伝えられていた。このため、告別式などは行われず、逝去されたことさえいっさい公表されなかった。ご近所や市役所、国会にも伝えられなかった。

1年以上たった2013年11月13日になって、どこからか情報を得た朝日新聞が「山田耕三郎さんが死去」と初めて伝えた。山耕さんは、大津市名誉市民の一人であるが、大津市のホームページの「名誉市民名簿」には、それからもしばらく、「御存命」のままだった。

私心なき稀有^(けう)な政治家「山耕さん」の ご逝去を悼む



ありし日の山耕さん

年末の12月22日、元大津市長・山田耕三郎さんの訃報に接した。享年95歳。亡くなられたのは9月22日というからすでに3か月が経過していた。葬儀は内々の家族葬で営まれ、逝去されたことは今も公表されていない。あのような高名な人の通常の葬儀であれば、おびたしい人々が参列しただろう。「多くの人に厄介をかけたくない」という故人の強い遺志で、そのような葬送がなされたようである。「山耕さんらしい」と改めて痛感する。私は18歳の時から50数年もの間、山耕さんに親しくしていただいた。私の知りうる範囲内だが、「人間・山耕」の姿の一端を書き留め、「私心なき高潔な政治家・山耕さん」の生涯に改めて思いを馳せたい。そして、心からご冥福をお祈りしたい。(2013年1月)

下村 勉 (大津あいあい保育園長)

「間違って当選した」29歳の村長さん

「山耕(やまこう)さん」と、多くの人が親しみをこめてこう呼んだ。

山耕さんは、「29歳の時、下阪本村の村長に間違って当選した」としばしば口にされた。奇異にも聞こえるその「間違って」の意味がある時、尋ねた。

するとこのように説明していただいた。

1947年(昭和22)、まだ戦後の混乱期、そして民主化のうねりが高揚する中、当時の下阪本村の村長選挙に青年団に担がれて立候補した。無名の青年が当選するなど当人を含めて誰も考えなかったが、若い息吹や民主的な村づくりを求める訴えに共感が広がり、それに面白半分の投票などもあって、まさかの当選となった。これが「間違って当選した」の意味だった。若くして、予想外の当選をしたことをこのような謙虚な言葉で語っておられた。

この話を最初に聞いたのは、私が大学に入って間もなくの18歳の頃だった。すでに50数年前のことだが、鮮明に覚えている。実は、私は高校生の時から、日本キリスト教団・堅田教会の西村関一牧師に師事していた。西村牧師はその時、左派社会党所属の衆議院議員でもあった。山耕さんも同党所属の県議会議員であり、西村議員の懐刀的存在であった。そんな関係から、いつしか山耕さんとも親しくさせていただくようになっていた。

下阪本村が天津市に合併したため村長は一期で終わり、そのあと、天津市議会議員を経て滋賀県議会議員となっておられた。その時、山耕さんは41歳の働き盛りの県議であった。

県都大津に初の革新市政を樹立

山耕さんは、下阪本村の村長にはじまり、市議2期、県議4期、市長2期、参議院議員2期を務められた。きびしい選挙戦もあったが、一度の落選もなかった。

その中で最大の激戦は、1972年(昭和47)の大津市長選挙であった。当時の社会党、共産党を軸とする革新統一候補として立候補した山耕さんは、保守系候補との一騎打ちに挑んだ。多くの市民・労働者が「明るい革新大津市政をつくる会」に結集してたたかったが、まさに大津を二分する激戦となった。

私は当時、保守系候補の足元の石山小学校に勤務していた。私たちの教職員組合の活動に激しいデマ宣伝が浴びせられた。たとえば、「先生たちの選挙活動」を非難する投書が「母親」を名乗って各学校に郵送されたが、全てニセ手紙であった。私はひるまず、学校だけでなく、居住地の「瀬田地区・明るい革新市政をつくる会」事務所などで、獅子奮迅の働きをした。まさに寝食を削っての活動の結果、私の体重は1か月程の間に5キロ近くも減った。当時、民間保育園に勤務していた妻も懸命に選挙活動に参加した。長男はまだ1歳になっていなかったから、必死の毎日であった。

必死の努力をしたのには理由があった。それまでの市政が市民の願いとかけ離れた「開発優先・福祉軽視」の市政であったからだ。これを打破するのが革新市政であると訴えた。当時、東京都の美濃部亮吉知事をはじめ、横浜・名古屋・京都・大阪・神戸・香川・福岡・沖縄などの太平洋ベルト地帯と呼ばれる日本の中心部に革新首長が次々と誕生していた。「革新は時の流れ」であった。結果は僅差の勝利だったが、大津市もその一翼を担うことになった。県都大津に初の革新市政が誕生した。選挙は、「大衆が動いたことによる勝利」と総括された。

メモ 山耕さんは大津市長を2期務めたあと、1979年に参議院議員に当選された。山耕さん最後の選挙は、1985年、定員1名の参議院滋賀地方区で、自民党候補を相手に30万票での圧勝であった。

「福祉の山田」と呼ばれ、保育行政に「三大偉業」

当選後の山耕さんの動きはめざましかった。選挙母体である「明るい会」が掲げた選挙公約の実現に次々と着手された。実は、その公約の多くが選挙活動を担った市民たちの願いを集約したものだった。なかでも、福祉分野の取り組みは顕著で、「福祉は行政の原点」と位置付けられた。まず、半年後の1973年4月に「障害児保育の制度化」が実行された。乳幼児健診から就学まで切れ目のない施策を行うという「大津方式」が始まった。

当時まで、障害児たちはほとんど保育園や幼稚園に入れなかった。乳幼児健診で「障害がある」と早期に診断されたばかりに入園できないという皮肉な状況が続いていた。親たちは「うちの子も健常児と一緒に保育してほしい」と願った。親たちの訴えを真剣に受け止めた新市長は、当時、坂本の真愛保育園と瀬田のつくし保育園などで行われていた障害児保育を全市規模に広げることを決意した。「障害児を受け入れる全ての保育園・幼稚園に加配職員を配置する」制度を全国に先駆けて創設した。この制度は、全国的な反響を呼び、連日のように、各地の自治体や保育関係者が大津の保育現場を訪れた。「大津では障害児が保育してもらえる」と、わざわざ大津に引っ越してくる障害児を抱えた家庭もあった。やがて、この制度は各地の自治体にも波及し、そして国の制度にもなった。

メモ 2003年に国が障害児保育から手を引いてから、各地で制度の形がい化が進んでいる。だ

が、「障害児保育発祥の地」大津では、障がい児保育は揺らいでいない。すべての障がい児が早期に必要な手立てを継続的に受けられるようになっている。

また、山田市長は「毎年2園ずつ公立保育園を建設」の公約にも着手した。1974年の朝日が丘、大平保育園を皮切りに、ひえい平、唐崎、膳所、皇子が丘保育園と、8年間の市長在任中に6園を建設された。同じ時期に民間保育園も4園が開設された。

さらに、山田市長は、民間保育園の職員の給与が公立と比べて数万円も格差があることに留意して、「給与助成金」を設けた。この制度は幾度も苦難に合いながら、今も存続している。

5年ほど前、私が山耕さん宅を訪ねた時、「私が市長の時、民間の保母さん方の給与助成金制度を作りましたが、これは今も存続しておりますでしょうか」と尋ねられた。制度創設は35年も前のことなのに、しっかりと内容まで記憶されていた。「はい、この制度のおかげで、職員の定期昇給ができています」と答えると、「それはよろしかったですね」と嬉しそうな表情をされた。山耕さん独特の丁寧な語り口が今も耳を離れない。

山耕さんが成し遂げた「障害児保育の制度化」「6つの公立保育園建設」「民間保育園への給与助成金」の三つは今も大津の保育行政の中にしっかりと根を下ろしている。私はこの三つを「山耕さんの保育行政・三大偉業」と思っている。

「住民本位」を貫いた山耕さん 毎週火曜日に市長相談

話は少しさかのぼる。私は1972年から自分の子どもを大津市立晴嵐保育園に預けていたが、初めの頃の同園の保育環境はひどいものだった。60名定員で保育室は3つしかなく、3歳未満児は全員が「すみれ組」というクラスに入っていた。生後数か月の乳児から3歳になったわが長男まで一つの部屋だった。「あまりにもひどい」と、同園の「父母の会」の会長であった私は、1974年頃から増築運動に乗り出した。

その時、山田市長は「住民本位」を基本とし、「市民の声をじかに聞く」ことをモットーにされていた。そのため、毎週火曜日の午後を「市長相談日」として、市役所玄関の案内室に陣取って、市民の要望を懇切に聞いておられた。有力議員や市幹部の紹介がなくても、市長に直接、要望を聞いてもらうことができた。

メモ 市長に就任した山耕さんは、公用車による送迎を断り、京阪電車で通勤した。電車の中での市民との語らいを大切にするためだった。この話題は、今でもインターネットで見ることができる。

増築の要望もこの仕組みのおかげで、スムーズに取り上げてもらえた。はじめ私たちは、同園の西隣りにある市有地を増築用地とするよう要望していた。ところが、担当課から示された計画では、園庭の半分ほどをつぶしての増築になっていた。増築で園児が増えるのに、園庭は逆に小さくなる…こんなことが納得できるはずがなかった。私は次の市長相談日に、「そのような増築計画なら反対運動を起こします」と市長に宣言した。市長は「市民の皆さんに喜んでいただけない計画ではダメですね」と答えられた。ほどなくして、計画が当初の要望通り、隣地を利用するものに変更されたことを知った。

それから数か月後、補正予算が市議会を通過し、起工式が執り行われる段取りになった。増築運動を起こしてから一年以上が経過していたが、2億円もの事業がこんなに早く実現にこぎ着けるとは、正直なところ、思ってもいなかった。式の始まる前、保護者を代表して市長の席に歩み寄って感謝を述べた。すると、ずっと立ち上がった市長はなんと、「大変遅くなりましたして、申し訳ございませんでした」と、びっくりするような返事を返してこられた。「こんなにも早く」と感激しているのに、「遅くなりました」とは、この人でなければ出てこない言葉であったと今も思う。

こうして、晴嵐保育園は120名定員となり、6つの保育室で年齢別保育が可能になった。

メモ その後、同保育園は光が丘の現在地に移転し、北大路の旧園舎はダイケアセンターや地域の図書室などに改築され、今も活用されている。

Episode 3

「地元を優先しない」政治姿勢

「知事道」をご存知ですか

話は、私の学生時代、60年も前にさかのぼる。県議の頃の山耕さんから聞いた話である。

私の郷里に近い伊香郡西浅井町に、「知事道(ちじみち)」というものがあるという。1958年(昭和33年)から谷口久次郎というこの地出身の人が知事を務めていたが、その人の家の前の道と国道とを結ぶ田舎道が知事就任のすぐ後に拡幅され、立派に舗装された。地域の人々は、「知事さんのおかげ」と喜んだ。山耕さんは、「これは間違っただけです。たとえ周りがそのようなことを計画しても、やめさせるべきです。自分のところをまずよくするというのはよろしくありません。」と批判された。山耕さんは、そのような政治姿勢を貫く人だった。

たとえば、下阪本公民館(市民センター)の改築の要望が地元から強く出されたが、地元を優先しなかった。先に着手すべき他の市民センターから順次、改築をすすめ、下阪本は市長退任間際になった。口さがない人たちは、「山耕は長い間、議員や市長をしていたが、下阪本のためには何にも役に立たなかった」という辛辣な批判を浴びせた。だが、事実上、「地元優先」を求める人たちの期待には添わなかっただけのことだ。

通常、選挙に出る人は誰も「地元の支援」を求める。地域によっては、自治会などの組織が集票マシンとなって住民を地元候補のために締め付ける。山耕さんはそのような支援を求めなかった。山耕さんは、「地元候補を支援するのは、当選後の見返りを期待するからです。支援してもらえば必ず地元のために働かなければなりません。政治家がそのように動くのは、自分の(選挙の)ためです。」と考えておられた。「自分を優先しない政治姿勢」「どの地域にも、どの市民にも等しく向き合う政治」には、「地元の支援」はかえって妨げにもなったのだ。

このような高潔な政治家がどれほどいるだろうか。

「あいあい」に生きる山耕さんの助言

前章に書いた通り、1999年10月1日、私は新しい民間保育園の創立を決意し、その決意を尊敬する3人の大先輩に伝えて、助言を求めた。

すでに参議院議員を引退しておられた山耕さんを下阪本のご自宅に訪ねた。私の決意を聞くと山耕さんは、「特徴ある保育園づくり」とともに「過剰投資を避ける」ことを助言していただいた。市長在任中に公立の6保育園を開設された経験からの忠告に他ならなかった。

山耕さんの二つの助言を何とかクリアーして、大津あいあい保育園は2001年4月1日、石山の地に、当初園児93名で開園にこぎつけた。開園直前の3月20日に開催した「竣工と感謝のつどい」には、山耕さんのご都合がつかず、出席いただけなかった。けれども、半年後の10月21日に開催した「西村光世ハープコンサート」にはご参加いただいた。当園をお訪ねいただいたのはこれが最初で最後になってしまった。残念というほかない。

ただ、山耕さんのひ孫さんを当園の園児として、2009年5月から2011年3月までのほぼ2年間、お預かりできたことは幸いであつた。

☆

30年ほど前、山耕さんのご母堂が亡くなられ、葬儀がご自宅で営まれた。ご遺族が並んで参列者を迎えられたが、長男であり喪主である山耕さんはなぜかニコニコしながら挨拶を交わしておられた。普通なら「母の葬儀なのになぜ笑うのか。不謹慎」と指摘されかねないところだが、「人間・山耕」の大きさ、心の豊かさを感じさせるものがあった。